ホーム-platform-

蒼山

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ホーム－ｐｌａｔｆｏｒｍ－

【Ｎコード】
Ｎ２８１２Ｅ

【作者名】
蒼山

【あらすじ】
「ホーム」の後日談的な物語である。

（前書き）

ホーム
１．ｈｏｍｅ
２．プラットホームの略。

※この物語は「ホーム」の続編です。先に「ホーム」をお読みいただくことで、この作品への
　理解が一層深まります。

引越しをして、少しは環境が変わるだろうかと期待したが…………。
やはり、駄目なものは駄目なのだな。
駄目、と言うより、無駄、だな。
……そう、無駄だ。
無駄なモノは無駄。
無理なモノは無理。
頭では分かっているのだが……。
どうにもまだ割り切れない部分がある。
いっそ、反発してやろうか。
いや、反発と言うよりも意思表示だ。意思表示をするだけだ。
まぁ反発と意思表示の線引きが俺にはイマイチよくわからないが…
…反発だって一種の意思表示、俺はテメェには従わないぜ、という
意思表示だ。もしかして線引きなんて無いのか？
いや、でもなぁ…………。
「おい、聞いているのか！」
「え？あ、はい」
俺の下らない低回はストップした。
「ほらココ、答えてみろ」
塾講師が言った。
生徒に当てて答えさせるってなぁーんか時間のムダな様な気がする
んだけどなー。
なんて思いつつ、俺は答えを言った。
合っていた。
ベクトルは俺に飯を食わせてはくれませんよ、先生。
その気になればな、今すぐにでも始められるんだよ。俺がやりたい
仕事は。
安いノートパソコン一台があればね。

最悪、ペンと原稿用紙があれば、ね。
でもそれを邪魔する奴らがいる。
二名様で、おタバコはお吸いになられません。
…………どうやってアイツらを黙らせようかねぇ。
「こら！聞いているのか！」
「あぁ、すみません」

終電間際の時間まで塾だなんてねぇ。
世間の学生が羨む程の素晴らしすぎる青春だよ、まったく。
と言うか、塾も塾だ。
終電の時間まで開けてんなよな。
「チッ…………」
静かな夜のホームに、舌打ちの音が響いた。
朝と夕方のラッシュ時には、溢れ返るほどの人間がこの狭いホーム
に犇いていて、そいつらのことをいつも鬱陶しいとか邪魔だとか思
うのに……こうも静かだと、なんだか少し寂しいような気分になる。
鬱陶しい糞共がいないのに。
……っていうか……。
「あぁ、終電ならもう行きましたよ。ダイヤの関係で、今日はいつ
もより少し早いんですよ」
…………………あぁ、そうですか。

俺はホームに戻り、ベンチに腰掛けた。
何となく、戻りたくなったのだ。
どうしてだ。
家に帰りたくないから？

それもあるな。実際、塾の終わりが早い日でも街をうろうろしてるしなぁ。
……まぁ、親は自習してると思い込んでるみたいだけど。
父さん、母さん。
自分らの前で何もしてないからって、いい子ちゃんだなんて限らないんだよ。
ま、そんだけ子供を見てないってことだ。
見て欲しいって願望はないけど、親として客観視したときには……どうかと思うね。
まぁいいや。
「…………」
俺はケータイを開き、時刻を確認した。
日付が変わって、午前零時十五分。
さて、もう帰るとするか。
駅前の放置自転車をパクっていけばいいだろう。
俺はベンチから立ち上がろうとした。
その時だった。
「やぁ」
「うぉっ！」
いきなり声をかけられたので、俺は飛び上がった。
なんだよ、やめろよ！
「ごめん、びっくりしたみたいだな」
いつの間にか、俺の隣に見知らぬ少年が座っていた。
おそらくは俺と同い年ぐらいだろう。
「いや、いいよ。っていうか、あの、どちら様で？」
……どこかで会った事があったっけな。
それに、何か妙な感じがする。
ホームに居るのに、家に居るような……。
「家に帰りたくないんだろ？」
「え？ あぁ、まぁね」

俺の質問は、スルーされた。
「どうしてわかったんだ？」
「たしかに、あの家族は嫌だろうね。お前に言うことはいっつも同じだ。勉強、大学、将来、その他糞ワード多数。……そうだろ？」
俺の質問は、またスルーされた。
無視すんなよ、とも言えず、俺は会話を続ける。
「まぁね。まったくその通りだよ。っていうか、ホント、何で知ってんだ？」
「そんなうざったい親のもとへは帰りたくない、と。概、そんな感じだろ？」
俺の質問は……また……スルーされた。
というかマジで何でコイツこんなに知っているんだ？
俺の疑問はそのただ一つだけなのに……なぜ………。
「ん？どうかしたか？」
どうかしたか？
って……あんた……。
「いや……何でも」
「じゃぁよかった。ま、話しを続けようぜ」
そう言って少年は続けた。
「お前は家に帰りたくない。それはウザい親がいるから。だろ？でもな………お前ん家でお前の帰りを待っているのは、親だけか？」
まぁ親がお前の帰りを待っているのかどうかは知らんけどねぇー、と、少年は付け加えた。
「どういう意味だ？」
「………さぁね」
俺の問いに。
少年は答えた。
それにしても……こいつ、どこかで会った事があるような……。
「…………」
俺は少年の顔を横目でさりげなく見つめた。

「何？俺は男に×××されたり×××たりする様な趣味は―」
「違うよ！」
俺は少年の顔から目を離した。
少年は笑った。
そして立ち上がり、尻をぽんぽんと叩いた。
「ま、そういうことだ。んじゃぁ俺はこれで」
少年はホームから出て行った。
後には、俺一人が残された。
途端に、寂しい空気が自分の周りに、どっと流れ込んできた気がした。
もとのホームの空気に戻った。
あの少年の持っていた空気―家に居るような空気は、もうどこにも残っていなかった。
……そういう、ことか。
「…………」
俺はケータイで時刻を確認した。
さすがに、もう帰らなければいけない。
親に不審がられないためにも、そして………。

あいつのためにも。

（後書き）

どうも、蒼山です。

あの……念のため言っておきますけど、決してネタが切れたというワケではありませんから！

苦肉の策で続編、的なコトではありませんから！

そのへん……ご、ご理解…………いただければ……と……思い……

……ばたん。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2812e/

ホーム-platform-

2010年12月17日02時25分発行